

著者 | 松井覚進 1937年、鎌倉市生まれ。62年、早稲田大学卒業、朝日新聞社に入社。72～76年、78～83年に名古屋本社に勤務。現在、朝日新聞東京本社企画報道室に勤務。著書に『パタゴニア自然紀行』『私たちの浅草』『学徒出陣五十年』『阿波丸はなぜ沈んだか』など。

えいにん つぼぎさく てんまつ
永仁の壺 偽作の顛末

まつい かくしん
松井覚進

© Kakushin Matsui 1995



講談社文庫

定価はカバーに表示してあります

1995年2月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——有限会社中澤製本所

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。(庫)

ISBN4-06-185892-0

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

永仁の壺

偽作の顛末

松井寛進

講談社

〈序〉『永仁の壺』に寄せて

松本 清張

朝日新聞の平成二年一月四日付夕刊の「にゆうすらうんじ」面に「空白への挑戦」として『永仁の壺』が連載されはじめてからわたしは欠かさずに読んだ。「翌日の新聞が待たれる」という気持ちを久しぶりに味わった。この連載を休む週二回の「にゆうすらうんじ」面に、いらしたくらいだった。反響が大きかったことは本書の「あとがき」でもわかる。

わたしの場合は、本篇の主人公加藤唐九郎さんとは一度も会っていない。紹介しようという人もあったが、故あって辞退した。小山富士夫さんとは永仁の壺事件で一度会った。当時『芸術新潮』にいた佐野雄志君が係だった。本書にも名の出てくる加藤宇助さんとは瀬戸で会った。「永仁の壺」の銘文が地元で問題になりはじめたところである。宇助さんは気前よく自作の「永仁」の陰刻の入った壺を一つ新聞紙にくるんで土産にくれた。土間にロクロを置いた暗い家の自宅で、夫婦二人だけだった。壺は飴色でなく、白かった。

贋作者の心理は二通りあろう。一つは金めあてからである。もう一つは、実技に自信があつて真物と同じものを作つて、目利きの鼻をあかしてやろうという意図である。前者を金銭的利益主義、後者を芸術的追求主義と仮りに呼んでおく。

加藤唐九郎（以下各人敬称略）は後者だとわたしは思っていた。だが、いくら彼が鎌倉時代の瓶子を美事に造つても、所詮は「写し」である。そこで廃れた古窯からの出土品を称することになる。かくして古瀬戸の権威ある鑑定家たちを驚愕讃歎させ、その蔭で唐九郎は会心の笑みを洩らす。同時期の陶器破片数百点をも造る（根津美術館蔵）。しまいには唐九郎の意識自体に自己が贋作者か真作者か区別が分からなくなつてしまふ。かくて真贋不二の朦朧たる心境が自ら編した『陶器辞典』の口絵に自作の「永仁の壺」をカラー写真で掲げさせたのであろう。——わたしはかく解していた。すなわち唐九郎の贋作は「芸術的追求主義」によるものであつて、なんら金銭的利益を伴つたものでないことと。

じつさい、新聞に連載がはじまる前に取材にこられた著者にはそのようにお話した。しかるに連載がはじまつて見ると、何と唐九郎は金銭的利益主義にも立っていたのである。

唐九郎は赭顔で体軀魁偉、豪放磊落、酒間に大声を發して人を烟に巻くかと思えば、夕暮「松留窯」に自作の鎌倉期の陶片を密かに撒布するの細心があつたという。文部省技官小山富士夫は長身白皙にして、酒をたしなまず、技を唐九郎に心酔してひたすらかれを信じた。

対蹠的な人間二人を設定すればドラマは自然とできよう。

著者の取材の広範と調査の綿密ぶりにはおどろくばかりである。じつに多くの証言を吟味し、堅実に推考の道を辿るさまは、なまかな推理小説が及ばない。この事件は多くの秘密に包まれていた。秘密というものには創造力を刺戟する作用があり、そうした人物や事件は重ねて解釈を要求してやまない、とはステファン・ツヴァイクの言葉だが、本書はそのような記録文学の高みにある。

謹厳なクエーカー教徒だった小山富士夫は唐九郎に欺かれてからはウイスキー瓶を呷るほどの酒徒に変じたという。ここで私事をはさむと、唐九郎がパリに遁げて未だ己の贗作たるを発表しないとき、約束の場所に四十分も遅れて来た小山技官が「永仁の壺は唐九郎のニセ作です。ぼくは近く文部省をやめます」と酔顔で、わたしと同席の佐野君に告げたのが強く印象に残っている。

目次

〈序〉『永仁の壺』に寄せて

松本清張

第一章「永仁銘瓶子を掘り出した」……………13

奇妙なプロセス／不可解な寄贈話／

“松留破片”の役割

第二章 一本だった壺が二本になった……………37

自ら案内した唐九郎／五万円で元代

議士の手に／永仁の壺2号は七万円

第三章「銘文が怪しい」……………59

松留窯と壺の関係／「重美」認定で

激論／『陶器辞典』の原色版／郷土

史家の究明

第四章 重要文化財に指定……………	89
-------------------	----

「陽刻仏花器」をめぐる疑問／黄瀬
戸事件／ポストン流出説／「馬ヶ城
七人の侍」／小山の提案理由

第五章 偽物説強まる……………	125
-----------------	-----

古陶磁展に出品／春峯庵事件／偽作
者探しへ

第六章 「永仁の壺は私が作った」……………	151
-----------------------	-----

正和銘の瓶子／唐九郎とピカソ／加
藤嶺男の告白／唐九郎の手記

第七章 本当の作者は誰か……………	187
-------------------	-----

唐九郎の弟・武一説／「古瀬戸写

し」／唐九郎自伝の食い違い

第八章 科学鑑定はクロ……………217

「重文」指定取り消しへ／「重美」の

ままの七点

第九章 二人は「壺」と一字だけ書いた……………245

小山富士夫への批判／唐九郎の名誉

欲／苦い思いを残して

あとがき……………276

文庫版あとがき……………282

解説 海上雅臣……………294

「永仁の壺」関連の本……………300

写真提供 ●朝日新聞社／壺中居

永仁の壺

偽作の顛末

第一章「永仁銘瓶子を掘り出した」

一九六〇年（昭和三十五年）、日米安全保障条約の改定をめぐって国内の対立が先鋭化したころのことである。一個の壺が巻き起こした奇怪な事件があった。事件の分厚い記録は、文化庁にマル秘文書扱いで保管されたまま、いまだに陽の目を見ていない。壺には「永仁二年」の銘があったため、世に「永仁の壺事件」といわれる。

壺は「鎌倉時代の古瀬戸で最古の銘をもつ」として、一年前の一九五九年三月に国の重要文化財に指定された。ところが、指定後八カ月で「鎌倉時代ではなく現代の作品だ」という偽物説が表面化した。一九六〇年八月になって加藤嶺男（現在は岡部姓）が、九月に父親の加藤唐九郎が、それぞれ「自分が作者だ」といい出した。

偽物と疑われたのは、永仁の壺だけではなかった。永仁の壺と同系統の「松留窯」作品に重要文化財や重要美術品が相当数あることがわかってきた。これら一群の作品の出自をめぐって、文部省、陶芸界、古美術界を巻き込む大騒動に発展する。一九五〇年（昭和二十五年）に施行された文化財保護法十周年のお祝い気分は吹っ飛んでしまった。

永仁の壺の制作から事件の後遺症が続く今日まで半世紀を超えるという歳月の長さ、その間にかかわった人びとの数の多さからいっても、特異な出来事であった。別に名づけて「永仁の乱」ともいわれた。虚と実が錯綜し、当事者はほとんど真相を語ることなく他界した。このため、国がいったん決めた重要文化財の指定を取り消すという前代未聞の事件には、なお謎が多い。陶磁器を愛し、美術に関心を持つ人びとの心の底に、事件は澱となって沈んだ

まま三十年が経過した。

奇妙なプロセス

「永仁の壺」の存在が、初めて全国の専門家に知られるようになったきっかけは、日本考古学会の学会誌『考古学雑誌』の一九四三年（昭和十八年）七月号の「彙報」という情報欄に、写真つきで紹介されたことだった。

「永仁二年銘瀬戸瓶子」と題した報告は、次のようなものである。

昭和十八年二月、愛知県東春日井郡志段味村大字上志段味字白鳥出土。

高 九寸一分。口径 一寸七分。胴径 六寸一分。

裾拡がりの所謂瓶子形で、全面に透明性淡飴色の土灰釉かゝり、半面に左記の刻銘がある。

奉施入 百山妙理大権現

御寶前

尾州山田郡瀬戸御厨